玉子王子　著

一章　おばちゃん扱いに、怒りの膝金蹴り

　背の高い金髪の男。

　パンツ姿。

　ちょっと夫に似ていると佐和子には思えた。

　最近ご無沙汰で、先月数か月ぶりにしたときには前はやらなかった事をしてきた。

　怪しすぎるが、聞けない。

　佐和子は一〇代のころよりかなり大きくなった乳房をちょっと自慢に思っていた。他の部分にも肉がついてきたことは意識しない。

　巨乳を布に詰め込んだビキニ姿。

　栗色の長髪。

　周りの女たちもみな水着だ。

　円形闘技場。砂の地面をレンガの壁が囲み、観客席が見下ろす形で広がっている。

　入り口は東西南北に一か所ずつ。地下からの二つと、観客席への二つ。

　どちらも閉ざされている。

　地下への道の片方から男が一人。

　もう片方から佐和子たち女が五人ほど。

　巨大な闘技場にしては選手が少ない気がする。

　客が多いので、仕方ない形だ。

　闘技場の真ん中で女性レフェリー兼実況が立っている。

　その前で向かい合う佐和子たち。

　こまごまとルールを説明する。

　最後に、膝を左右外側に向け、腰を突き出す。

「最後に。言うまでもなく、男女対抗の何でもあり格闘なので、ここへの攻撃も当然あり」

　神妙な顔で唇を引き締める男。

　ニマ、と笑う女たち。

「きゃー、やだあ」

「同じルールでも、男女じゃ意味違うよね」

「男の人のここには、大事なモノついてるもんね」

「玉」

「タマタマ」

「キ〇タマ」

「ちょっと、女として」

「私ら主婦よ、既婚者よ？　旦那が若いころは毎日おマ〇コして、息子の友達のチン〇ンまでおしっこの時持ってあげてきた大人女子が今更キ〇タマぐらい……ねえ」

「あは、そうだったわ」
　楽し気に女子トーク。対戦相手に聞こえるように。
　顔を赤らめて黙って聞いている男。
　その股間をチラチラ見つつ、主婦の一人が手を上げる。
「レフェリー、男性のここ……ボールですけど、狙っていいってことですか？」
「はい、男性の急所……おキンキンを狙っていいという事です」
　聞くまでもないこと。
　もちろん、本気で質問しているわけではない。
　急所やっちゃうぞやっちゃうぞ、というような会話を聞かせるための質問だ。
「ギュっと、ボールを握っても」
「ボール握り、オッケーです」
「ボールをそのまま握り潰しても」
「はい、どんどん潰してオッケーです。ナノ薬で治るので、遠慮は無用ですよ」
「おニンニンを引き抜くのも？」
「あは……それするぐらいならおキンキン潰すほうが絶対楽ですが……もちろんおニンニン引き千切りもオッケーです」
「金的キックも」
「金的キックもどうぞ」
「金踏み潰しも」
「二個とも踏み潰してオッケーです」
「寄ってたかって抑え込んで、男の急所を……」
「はい、握り潰してオッケーです」
「へー、ですってさ。急所攻撃オールオッケー。ついてる人にとっては、大変なルールだよねえお兄さん」
　これといった特徴のない、年相応に肉がついてきた感じの主婦らしい女。
　三〇から四〇行くかどうか。
　五人のうち、三人はそんな感じだ。
　残り二人、佐和子ともう一人は二〇代に見える。
　ニヤニヤと、熟女三人が男の股間の膨らみを見る。
「金的潰し玉潰し」
「男の急所を握って潰す」
「安心して。金的蹴ったらおキンキン潰れてないか見てあげるから。おチンチ〇サイズもついでに見てあげるから」
「ハーフなんだよね？　それじゃ期待していいのかな」
　元ハーフタレントで、やってはいけない薬をやってしまい逮捕、芸能界を引退。
　それでも派手な生活が忘れられず借金漬けに。
　そこで闘技場関係者に目をつけられた。
　試合に出れば借金を返せる。

負けてもファイトマネーがもらえるので、確実に返せるのだ――それは口止め的な意味がある、合法な闘技場だが、だからといってどこからも文句が来る余地がないとはとても言えない形態の興行である。

怪我をしてもナノテクですぐ治るので、リスクもない。

……と、誘うが、女たちに急所を一方的に集中攻撃され、去勢される可能性があるというのは、そのあとで問題なく完治するにしても男にとっては絶大なリスクでしかない。

が、全員女性の運営その他の闘技場スタッフにそんな感覚はなかった。

治るからいいだろう、というスタンス。

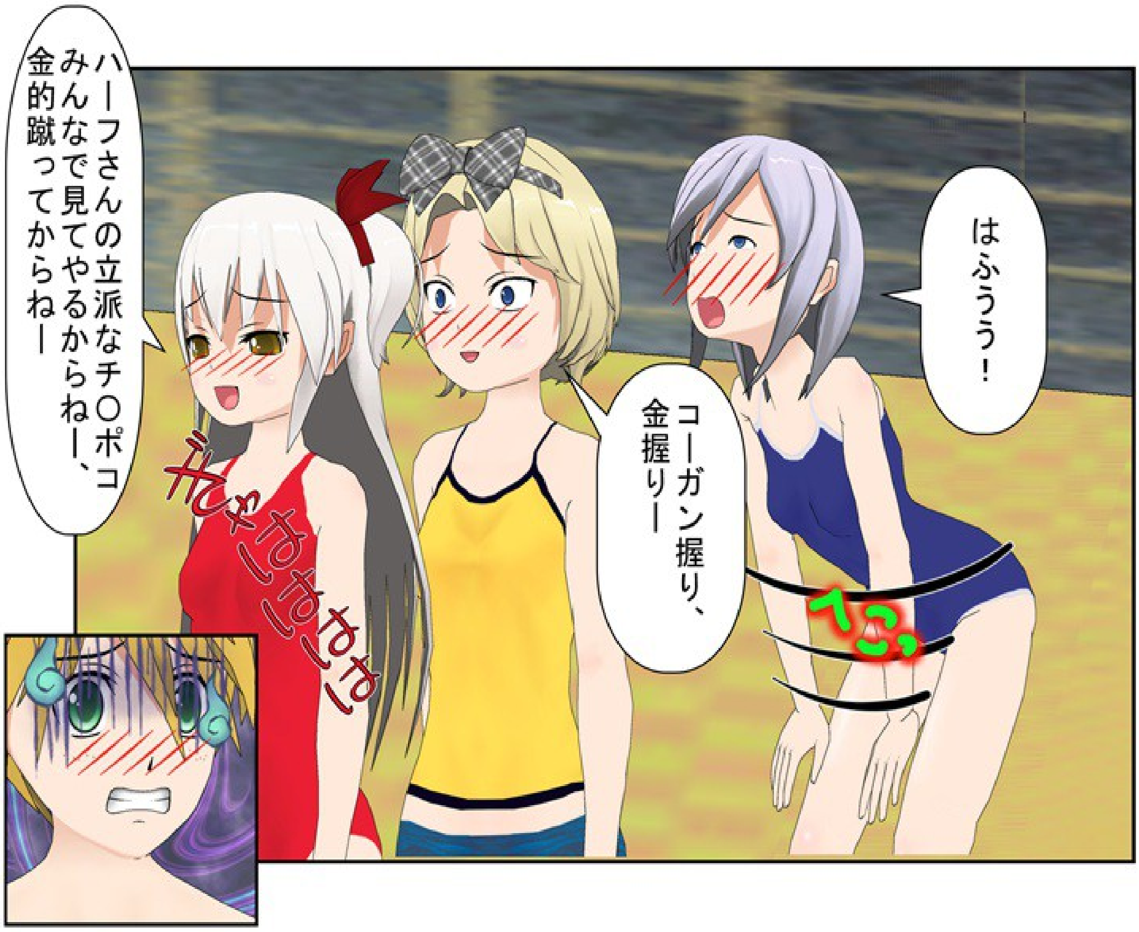
一方で、痴漢だって減るもんじゃないだろうなどといわれれば睾丸を蹴り上げかねない、勝手きわまるスタンス。

主婦たちが――といっても佐和子たち若い二人も主婦だが――自分の股間に手をやり、何か握る形をしたり、押さえてヘコヘコと腰を引いて見せる。

「はふううううっ、キ○タマあああああ」

「コーガン握り、金握りー」

「ハーフさんの立派なチ○ポコみんなで見てやるからねー、金的蹴ってからねー」



挑発、脅迫。

膝を締め、明らかに急所攻撃を想像して委縮している元ハーフタレント。

それをさりげなく見つつ、ニマ、と若い主婦がほほ笑む。

「言ってたとおりですね佐和子さん。まずは口金的」

「そうね、あの人、おキンキン攻撃にビビっっちゃってる。そんなに怖いのかな？」

「それは……男の人の急所らしいですからね」

顔を赤らめつつ、元ハーフタレントを見る。

夫と似ている、背が高いことも同じだし、雰囲気的に。

だから、思いきり行きたい。

急所を、思いきり責めてやりたい。

本当は夫にやりたいことを。

——浮気して他所で自分だけエッチとかふざけやがって……寝てるときにチ〇コ切ってやろうかと何度思ったか……

陰茎を切断してもナノメカ入りの薬一粒ですぐに治る。

だから、佐和子の考えは冗談というか「絶対にやる気がない上っ面だけの思考」とは違う。

とはいえ、本気でやる気かというとそれも違う。

微妙なものだ。

ともかく、男は微妙に腰を引き、股間を庇う感じだ。

主婦たちの狙い通り。

男女対抗の格闘戦。禁じ手なしなので当然男の急所が**集中的に狙われる。**

男同士ならお互い遠慮することもありうるが、男女の対決なので女のほうは同じ反撃を受ける可能性がゼロ、潰してもすぐ治るので後のことを考えてかわいそうという事も一切ない。

何の遠慮もなく、**金的金的アンド金的**の展開となる。

それはもう確定で、だからこそ相手が股間周辺に隙を見せるわけもない。

ならば、むしろ口で急所攻撃を示唆しまくり、余分に防御を考えさせたほうが得というのが、潰した玉は星の数**×２**のこの闘技場のベテラン女性闘士らの共通認識だ。

急所攻撃を怖がれば動きも鈍る。

そうして優位に立つための口八丁を「口金的」と呼んでいた。

ルール説明が終わり、距離をとる選手たち。

満面の笑みの主婦たち。ちらちらと、離れた男を見て、自分の股間を叩いて威嚇して見せる。

目を逸らす元ハーフタレントを見て、楽しげに笑う。

「いや、効いてる効いてる」

「ここに来るからにはタマタマ攻撃は覚悟してるんでしょうけど……目の前の女に直接言われたらやっぱ男ってビビるのよね」

「絶対縮んでるよあいつ、ハーフのビッグチ〇ポ縮んでるよ」

「口金的、こんなに効果的とは」

「あはは、まあ半分趣味だけどね」

「二人とも、大人になってから急所……男の股間蹴ったこととかはないのよね」

「なかなか……小学校以来」

「私は全然」

おとなしい少女だった佐和子。

「あんながっしりした大人の男でも……キ〇タマやられたらこんなに弱いのかってきっと驚くよ」

「で、病みつきになる」

「ここに来始めてから、旦那ともめるとすぐキ〇タマ蹴りするようになっちゃったよ」

「私も！　っていうか、金蹴りのあとのエッチって燃えるよね」

「燃える！　濡れるしさ、妻からの玉蹴りで男否定された旦那が、それ補うのにもう、バンバン腰振ってくんのよ。自分の旦那が雄だって、中で激しく動いて思い知らせてくれて、ますます雌として濡れちゃうという……」

「それな！　もう……**今日帰ったら旦那のキ〇タマ蹴ろっと！**」

「さあ、そろそろ試合開始です！」

レフェリーに言われ、向かい合う六人。

いくら男でも、女五人を相手にするのは無茶と思える。

ハーフだけに、体格もいい男。

引き締まった体に浮き出す筋肉に思わず唾をのむ主婦たち。

レフェリー兼実況の声が会場中のマイクで拡散される。

「元ハーフタレント、竹本ホルツ選手！　借金を返せるだけのお金が手に入ることはもう確定してい

ますが、問題は勝てるか、無事帰れるかです！　キャン玉のお持ち帰りが功名の第一歩です！　帰り道で**お姉タレントに転向していない**ことを祈ります！」

顔を赤らめるホルツ。

「対するは、主婦五人組！　ベテラン闘士三人と新人闘士二人です！　いつも通りの、新人を鍛えるための布陣といえます！　明らかに体力で劣り、格闘の素人でもあります。でも大丈夫、男には、女の子にはない急所がぶら下がっている！　そこを狙い撃ちにすれば楽勝です！　フグリを狙え、フグリを狙え、女の子ならフグリを狙え！　治る時代だ、遠慮は無用！」

おおお、と観客の声。

女性ばかり。

本当に、女性しかいない。

広い円形闘技場の観客席を埋め尽くし、試合場を見下ろす。

または、天井や飛び回るドローンからのカメラ映像を椅子の前の末端に映している。複数画面も一つの画面も、ズームも切り替えも自在である。

ほとんどの観客が、分割した画面の一つはＧカメラに設定していた。

Ｇカメラは、すなわちゴールデンカメラ。男性選手の股間を常におい、ズームで映し続けるカメラである。

それを凝視しつつ、女性客らが叫ぶ。

「金的よ、金的！」

「男の急所を狙うのよ！」

「そんなわかりやすい弱点ぶら下げて、女の子様に勝てると思ってんの！？　思い知らせてやって、男の弱さを！」

「早く数の力で抑え込んで男子の急所を握り潰してあげて！」

「コーガンなんて邪魔よ邪魔、ぴちっとした服も着られないでしょ。抜いてあげて！」

「竿も切除切除！　**ついでに**ね！」

女が男の急所を責め、破壊するところを見に来ている。

そんなドＳ女性ばかりの観客たち。

世界一ドＳ女性の割合が多いとされるうさぎ県らしい、恐ろしい客層。

相当数が、自分もベテラン闘士という、客であり選手というものたち。スタッフが休みに観に来ているというパターンもあった。

みんなで楽しく、この場を作り上げている。

唯一の不満は、男性選手の九九パーセントが一回しか試合に出てくれないことだ。

なんでリピーターになって一緒に楽しんでくれないのか、と不満である。

男の立場から見れば、なぜ「リピーターになってくれない」などと不満に思うのか意味不明だ。

なるわけがない。

僅かな例外も、借金が多く、止むに止まれず出るだけで望んで出る者はゼロだ。

ドMが望んで出ることもあるが、寄ってたかって金的を蹴られるとさすがに逃げたくなる。が、逃がしてもらえず、延々金的を蹴られ、踏み潰され、握り潰され、ついには「逃げようとした」事へのペナルティーとして客まで乱入して去勢リンチなどとなれば、もういかなドMといえども耐えられる限界を超えている。これが玉が再生しない時代なら、「玉が潰れたので今日は残念ながら」という終わりがある。

だがナノ薬一粒であっさり治るのでは、完全に意識不明になるまで延々去勢が続くのだ。

耐えられる人間などいない。

ともかく、試合開始。

——大丈夫だ、女相手。女相手、いける、いけるはずだ……

ドクンドクンドクン、すでに早鐘のように鳴る心臓の音を聞きつつ、自分に言い聞かせるホルツ。

初めの試合までは、みなホルツのように考えられる。女相手なのだから何とか、と。

そして、実際どうにもならず、誇りと急所を女たちに粉砕され、闘技場を引退となる。

急所攻撃と男性器破壊を絶叫、アウェーの観客の中、それでもホルツが進む。

散開する主婦たち五人。

ニヤニヤ笑い、自分の股間を叩いたり、指でボールを作り、そこを狙うと示唆する。

「一回だよ一回、キーン、で終わり」

「あとは遊びだから」

「かかって来いよ！」

拳を振り回すホルツ。

前に立とうという女はいない。

回り込もうとする。

その一人に駆け寄るホルツ。

「おらっ！」

「きゃああぁ！」

「え？」

だだだだ、と背を向けて走る主婦。

全速力で逃げられては、戦うどころではない。

「こ、この……あっ」

「ほっ！」

後ろから別の主婦。

横蹴り。

というほどでもないが、割と大きめの乳房をブルっと揺らしながら蹴ってくる。足の裏を突き出して叩き付けるような蹴り。

それがホルツの背中に当たる。

「この！」

振り返り、爪先を蹴り上げる。

「きゃっ！」

ボス、と主婦の股間に当たる。

「よしっ！」

「痛いわねー」

「え」

「あは。えってなによ。女相手に、股間蹴っても大して意味ないに決まってんじゃん」

膝を締め、蹴り上げられた股間に相手の爪先を抱え込み、足を捕まえる主婦。

「やった！」

「もう掴まえた」

「男の人なら無理よね。今の蹴りで一発で終わりだもん」

「でも女の子様なら、普通に捕まえられる」

わらわらと女たちがホルツを囲む。片足立ちでよろける。

「ま、まて……」

逃げていた一人も戻り、左右から近づく**ベテラン去勢格闘士主婦**。

「おーっと、ホルツ選手絶体絶命！　必殺の金的蹴りを見事命中させたはいいが、なんと、相手は女の子様であるため股間は無敵、金の玉がついてないのであっさり足を捕まえられました！　そして今包囲され……」

「ちょ、ま」

「はい捕まえた」

「こっちも」

「うわああ！」

「両手をつかまれたホルツ選手！　引っ張られる！　股間ががら空き！　やっちまえ、**フグリを潰せ女の子！**」

「さ、早く金的蹴って！　金的蹴って！」

「佐和子さん、ここは私が！」

パッと顔をほころばせ、若い主婦がホルツの斜め前に立つ。

ペコ、と頭を下げる。

「それでは、そこ、蹴らせていただきますね」

片足と両手を三人の女につかまれ、片足を挙げて股間を無防備にしているホルツ。汗を噴出させ、ぴょんぴょんと片足で跳ぶ。

「まて、まて！　卑怯だろ、これは卑怯……」

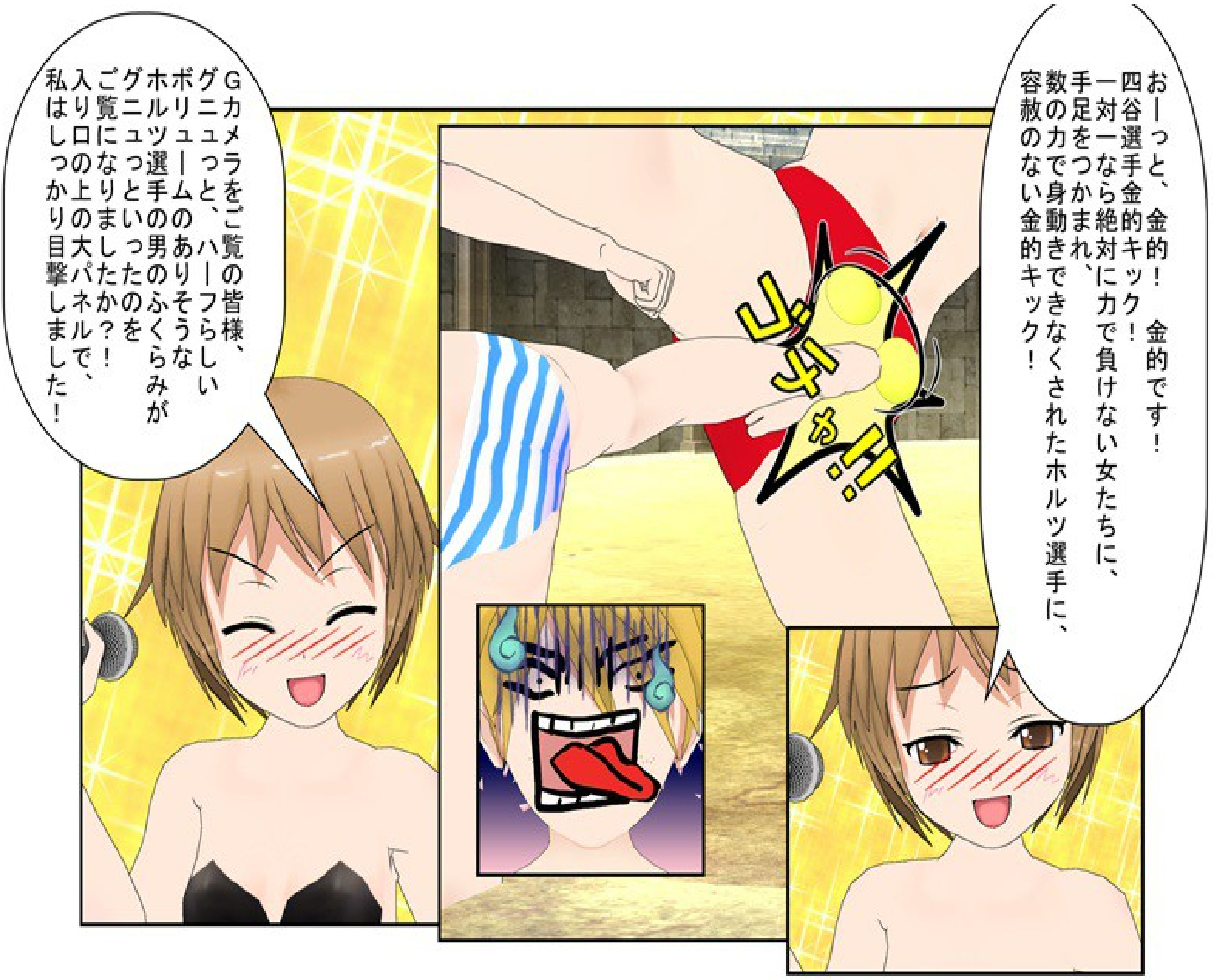
「確かに卑怯ですね……」

「そう、だから……」

「でもキーン！」

「はほっ！」

「おーっと、金的！　金的です！　四谷選手金的キック！　一対一なら絶対に力で負けない女たちに、手足をつかまれ、数の力で身動きできなくされたホルツ選手に、容赦のない金的キック！　Ｇカメラをご覧の皆様、グニュっと、ハーフらしいボリュームのありそうなホルツ選手の男のふくらみがグニュっといったのをご覧になりましたか？！　入り口の上の大パネルで、私はしっかり目撃しました！」



　東西南北の入り口の上、正確にはそれがある面の壁の上のほうにだが、巨大モニターがそれぞれ設置されている。

　そこにホルツの股間のドアップ画像が写っていた。今の瞬間ではなく、金的の瞬間を巻き戻しで何度も再生、ゆっくり出したりもする。

　本当にそれが好きな女性客のための闘技場なのだ。

　蹴られた時の顔のほうも、小さい画面で出されている芸の細かさ。

「ごりゅっと、タマタマがごりゅっと足の甲に押し分けられるのがスロー再生で……今出ています、あは！　そんなに強くは蹴っていません、初心者女性はやはり、そんなにいきなり金的を思いきり蹴れません！　先ほどのホルツ選手の蹴りのほうが明らかに、はるかに威力があった！　でも……」

「うんぐうううううう！」

　腰を引き、尻を振るホルツ。

　唇を噛んで白目を剥くような顔をしてじっとりとした汗を噴出させる。

　眩暈と吐き気という金的を受けた男を襲う神経の失調と、女に急所を蹴られ、男としての自分を否定されたような屈辱に悶える。

　悶えつつも、手足を持たれているので股間を抑えることもできない。

「ふんぐううう」

「ぎゃはははは！　すっごい耐えてる、耐えてるよこいつ！」

「キ〇タマ痛い？　痛い？」

「もう一発蹴ってあげて」

「や、やめええ」

「ごめんなさい！　はい、キーン！」

「はぐうううう！」

　パン、二度目の金的爪先蹴り。

「ほごおおおおお、きん、きんんんん」

「金的です！　四谷選手再びホルツ選手の睾丸を蹴り上げる！　男の一番弱い所を狙い撃ち！　こんなことして大丈夫でしょうか？　仕返しに、同じように股間を蹴られたら……あ、私たち女は、タ〇キンぶら下げてないから同じように蹴られても全然平気です！　ならどんどん急所狙っていったほうが得という理屈！」

「ぐうううう、き、汚ねええええ」

「佐和子さんも急所を……グニュッとして面白いですよ！　それに……あの顔、こんな軽い蹴りで頑丈そうな男の人があんな顔するとか、楽しくて……」

「え、でも……」

「佐和子さん、膝蹴りいって」

「膝金」

「蹴りで素人がキ〇タマ潰そうと思ったら、膝金だよねやっぱり」

「潰しちゃえ、潰しちゃえ」

「あいつ見てるよ、佐和子さんのオッパイ。エロいわねー」

　か、と顔を赤くしてビキニに包まれた巨乳を抱え込む佐和子。

「いやん、そんな……私のことをそんな目で？」

　まんざらでもない感じの佐和子。

　脂汗を流しつつ、頭を振るホルツ。

「み、見てねーよ！　オバンのバストなんて！　俺モテるから、オバンなんて……」

「……っへー、おモテになるんだ？」

　金的攻撃で盛り上がっていた主婦たちがすっと笑顔を消す。

「あ、え……」

「オバンには興味なんてないですよねー、ハーフタレントさんですもんねー」

「外人好きで、顔だけで男選ぶクソ女に大人気だもんね」

「ブスでも、若けりゃいいんだよね？」

「寄ってくるのは顔だけで選ぶブスで馬鹿ばっかりでも、女にモテない奴よりはあんたのほうが上よねー」

　唾をのむホルツ。

　――やべえ、ババア扱いにこいつらキレてる！　ババアだからホントのこと言われたら、そりゃキレるよな！　まずい、何とか……あっ。

　白けた顔の佐和子が、密着するほど近くに立つ。

　手足を持たれ、片足立ちのホルツの無防備な股間の前で、足を後ろに引く。

「さー、それじゃおばちゃんごときの攻撃で、イケメン強者男性さまはビクともしないでしょうけど、試合だからやらせてもらいますわ」

「ちょ、ま……やめ……」

「キ〇タマ潰れろっ！」

「ふぐっ！」

　グチ、と思いきり肉に押し付けられる主婦の膝。さらに力づくでゴリゴリと肉をプレスしながら股間を這い上る、やや下から、一物まで**絨毯爆撃磨り潰し**。

　それでも、女相手なら「痛い」程度。

　だが、ホルツは男である。すっきりと臓器を体の中に収めた女性と違い、特有の臓器が股間に露出している。

　いや、していた。

「ほぐうううううう！」

「おーっと、膝金、膝金的、おキ〇タマへの膝蹴り、最も睾丸を潰しやすいとされる股間への膝蹴り！　佐和子選手（名字で登録していれば苗字、名前なら名前で呼ばれる）容赦なき金的キック！　やや下から、ハーフなのでご立派に違いないシンボルまでゴリっとこすり上げるような膝金、これは痛い、これは痛い、男の子には耐えられない攻撃！　男なので絶対無理！　男は無理、ついているので無理！　潰れてしまう、男子の証が二個とも潰れる！　金の玉が潰れる、金の玉が潰れる、男の急所の金の玉が潰れるうう！　泡を吹くホルツ選手、これは潰れた！　これは潰れた、コーガン潰れた、コーガン潰れたああ！　終わった、男として終わってしまった！　明日からお姉タレントとしてお茶の間に電撃復帰してしまう！　そんなことになったら「元ハーフタレントの元男が主婦をディスってキ〇タマ潰される自業自得の顛末」とか週刊誌に書かれて**国会で取り上げられてしまう！**　全国民にホルツ選手が玉無し野郎だと宣伝されてしまう！　みなさん、彼が玉無しであることはどうか秘密にしてあげてください！　ホルツは玉無し、ホルツは玉無し、ホルツは玉無し！　あんたはもうキ〇タマがない！　男じゃない！　玉無し野郎だよ！」

　実況、途中からは倒れて泡を吹くホルツに絶叫してるレフェリー。彼女も若いといえば若いが、**若いといわれて喜ぶぐらいの若さ**でしかないので、ホルツの発言は刺さっていたようだ。

　倒れたホルツを囲む主婦たち。

「やだー」

「一発？」

「潰れちゃったんだ」

「佐和子さんやるー」

「蹴ったことないとか嘘ばっかり」

「**玉蹴り人生**だったんでしょ」

「どういう人生ですか！？　初体験ですよ……うわ……こんなに一発で、こんな強そうな人が……泡吹いて……やだ、本当にその、急所、潰れちゃった？　やだあ、大丈夫ですか？」

　しゃがみ、話しかけるが白目を剥いて痙攣し、泡を吹くだけだ。

「第一ラウンド、勝者女性チーム！」

「キャーやった！」

「**キ〇タマ潰して大勝利！**　見たか男ども！」

「こんな急所ぶら下げて、女の子様に勝てると思ってんの？」

　突き出した股間に指でリングを作り、玉二つを示す主婦。
　ベテラン三人は飛び跳ねんばかり。
　新人二人、佐和子と四谷は顔を赤らめ、まじまじとホルツを見下ろしている。
「やだ……本当に、男の人って」
「タマタマは弱いんですねー急所だってのは知ってたし、キ〇タマ狙って男子に負けたことなかったけど……体大きくなったらそれも通じないと思ってたのに……案外変わらないんだ」
「ほんとに潰れちゃったんですかね？」
「あ、やだあ、佐和子さん……もう、わかったわよ。確かめたいのね？」
「え、そんな」
「あくまでも、タマタマをね」
「やだあ」
「ハーフの人のがでっかくても、旦那への愛は変わらないわよ」
　ニマニマしつつ、股間のほうに動く。
　と、喜んでいたベテランやレフェリーも集まってくる。
「さあ、タマタマがどうなってるか確かめないと」
「治療のためにね」
「早く治療してあげないと、あと九ラウンドあるので」
　ノックアウトされて終わるようなルールではない。
　それだと一度金的が入るとそこで終わりになりかねない。
　ただでさえ男性選手は貴重なのだから、一人を限界まで味わい尽くさねばならないのだ。
「うふふ、それじゃ治療開始します」
　パンツを摘まむ四谷。
「ご立派なんでしょうね」
「膨らんでるもん」
「はい、御開帳」
「あらっ」
「うわ、何これ……包茎じゃん」
「小指みたい」
「やだ、**金袋は結構立派**なのに……」
「まあ中身崩れてるけど」
「二個とも……ねえ」
「ご覧ください皆さん！　佐和子選手の膝蹴りにより、完全にホルツ選手の睾丸は左右共に破壊されております！」
　おお、と観客らが声を上げる。
「よっしゃ、潰れた！」
「まだまだ、あと九回潰すんだからね！」
「計１８玉！」

「っていうか、こいつチン〇ン小さいね！」

「体はすごいのに……バランス悪いわ」

「まあバスケ部の背の高い子が、デカいって噂されてたけど短小包茎だったなんてよくある話でしょ」

「誰よハーフはデカいとか言ったの」

「あ、タマタマが戻った」

「玉は普通の大きさね」

「目が覚めたら、短小見たことは秘密にしましょうね」

「これだけの女の前でキ〇タマ潰されたんだから、さらに粗チンまで見られたと気づくのはかわいそうだもんね」

「っていうかうちの幼稚園の息子と同じぐらいか、ちょっと小さいんだけど」

「でも、顔がいいからモテるなら勝ち組チ〇ポだよ」

「顔で選ぶクソ女にはあの短小チ〇ポクソチ〇ポがお似合いという理屈ね」

「あーあ、イケメンくんのデカチン〇ンが見れると思ったのにー」

「出てきたのは短小包茎クソチ〇ポかー」

「まあヤリチンらしいからましだね。これで童貞だと気の毒過ぎて笑えないわよ」

「一生童貞っぽいオタクくんなんかがかなりデ〇チンだったりして、やっぱり世の中バランス取れてるなって」

「いや一生童貞って時点で巨根だろうが悲惨でしかないでしょうが」

「そう思えばこれはラッキーチ〇ポクソチ〇ポってことね」

「まあ私ならこんな**入れたかどうか一々確認とらなきゃならなそうな短小**とか無理だけどね」

「デカい必要はないけど、短小は勘弁って話」

「それな」

　短小を肴に盛り上がる観客女性たち。

　目を瞑っているホルツ。

　ナノ薬で玉を再生され、騒音で目が覚めたが、起きるタイミングを見失っていた。

　唇を噛み、顔を赤らめて震える。

　――ち、畜生、見られた……俺の……並みより少しだけささやかなチ〇ポを……

　動けないホルツ。

　股間の横でしゃがみ、まじまじと見下ろす佐和子。

　引き締まった太ももに、引き締まり過ぎて皮にもぐりこんだ一物。

「でも、この人自分のどのぐらいと思ってるんだろう？」

「そりゃ極小でしょ」

「自分を誤魔化してたりしてね、そんなに言うほど小さくない、周りが大きいだけだって」

「誤魔化しようないでしょこれは。周り松茸ばっかりで自分だけツクシじゃ、誤魔化す余地ないでしょう」

「いやいや、そこがサイズを気にする男性の心の巧妙なところ。何とかごまかしちゃうんじゃないか

な？」

「やっぱり気にするのかなあ、男の人は」

　言いつつ、ふと顔のほうを見る佐和子。

　——あら、起きてる？

　四谷が肩を叩く。頭を振り、立ち上がる。

「ねえ、四谷さん……」

「小声ね、小声。あは、わかってる。あの人起きてるよ」

「やだ……じゃあ短小チン〇ンディスってるの聞こえてたんだ」

「あははは、でも何も言えないから、寝たふり」

「気づかないふり。こうやって自分を誤魔化してきたんでしょうねえ……その結末が、イケない薬をやって芸能界追放」

「ちょ、短小とは関係ないですよ！」

　小声で噴き出しつつ話す。

　ベテラン闘士らも、当然気づいていた。レフェリーもだ。

　カメラで見ている観客も、ほとんどが気づいていた。

　が、何も言わない。

　起きてんだろー、わかってんぞ。というよりも「気づかないふりに気づかれていない」と思わせたほうが面白いと踏んでいた。

この後、ホルツに更なる玉潰し。

必死で戦ったり逃げたり、居直ったり発狂した振りをしたりと狂乱するも、どうにもならず潰されまくります。

まあそれでもどうせ玉は治るんだし、借金は消えるわけだからハッピーエンドだろ、というのが闘技場運営側の女性たちの考えです。

さらに、何とか助かろうとセコンドを人質に取り、逆に玉を握り潰されて倒され、反則負けとなって観客らに延々玉潰しを食らうことになります。

続きは製品版でぜひお楽しみください。